
SHADE

紡 小唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHADE

【Nコード】

N4092D

【作者名】

紡 小唄

【あらすじ】

魔族であるカルマは、ただひたすら追っ手から逃げていた。傷つき倒れこんだその場所で、小さな少女と妖精と出会う。自由を求めるカルマだったが……。

EPISODE : 01 (1 - 1)

何の為に生きるのか。

飢えた喉が酸素と水を求めてひゅうひゅうと音を立てていた。

足はさながら棒のようで、引きずっているのか前へと踏み出しているのかさえ区別がつかぬほどだ。

俺はそれでも己は走っているのだと思っていた。

同時に走らなければならないのだとも、理性ではなく本能で感じ取っていたのである。流れ落ちるのは、体中から吹き出る汗と手足から滴り落ちる血液のみ。

自分の意識の何処か遠くで何かを必死に摸索し続ける。

何の為に生きるのか？

こうまでして生きる事の意味が本当にあるのだろうか？

時折自分に問いかけてはみるものの、その答えを返すだけの余裕など俺にはとつくになくなっていた。

もういい、疲れた。

声にならない声を心中で発し全てを放棄しながらも、それとは裏腹に手足だけは本能に従い安住の地を求め休む事無く動き続けている。

何故こんなにしてまで俺は四肢に鞭振り走り続けなければならないというのか……不意に何だか自分の行為が馬鹿らしく思えて口元からは無意味な音が漏れる。

俺は追われていた。

それも、一人や二人じゃない何十という数の殺しを専門とするい

わゆる雇われ魔族という奴らにだ。単純な仲間割れなどで追われているのではないことは言っておこう。

あの男が全ての元凶。

「くっ」

吐き気がする。

あの顔を思い出すだけで何も詰め込まれていない胃から胃液だけがせりあがってきて、俺は少しそこに水っぽいものを吐き出した。少し楽になったと脳味噌の片隅で呟いた瞬間、目の前がぐらりと傾く。

ああ、そうか。

傾いていく景色に俺は自分が倒れていくのだと、他人事のように思っていた。

鈍い痛みが体を襲い、均衡を取り戻した俺の世界には青々と雑草が生い茂っている。

目が霞む。先程まで世話しなく動いていた身体が嘘のように、指先一つ動かない。

さわりさわりと風だけが俺の髪とそこに生い茂る雑草を撫でていた。

静かだ、何も聞こえない。

遠くなる意識の中で俺は考える。

なんだ、死ぬために生きるのか。

ふと口元が綻んだ。

馬鹿みたいじゃねえか、馬鹿そのものだな。

そんなのが答えなら、とっとと諦めちまえば良かったのに。

……冷たい。

口元に何かが落ちてきた。

渾身の力で口を開けてそれを飲み干す。

水だ。

しばらくすると、また水がぼたりぼたり俺の口元へと落とされる。何故？確かめようとしても瞼は鉛のように重くて持ち上がらない。口だけをパクパクと水を求めている俺の姿は、さぞ間抜けなことだろう。

「うっわー、間抜け面。池の鯉みたいだぜコイツ！」

思った矢先に真上からムカツク甲高い声が聞こえてきた。

「ロイ……ダメ」

その隣からは、まるで小さな鈴が鳴るような少女の声が聞こえる。

「だーってよ、サリナ。こいつの口だけ見てるとおっかしーぜ」

「水、もういちどもってくる」

隣から気配が一つ消える。

近くに水場があったのか？そもそもここはどこなんだ？僅かながら喉を潤し、思考回路が戻ってきた俺は全神経を集中し、ゆっくりと目を開けた。

瞼は相変わらず鉛のように重い、眩しかった太陽はもうすでに姿を隠し始めているようだった。なんとか動くようになった目だけを、少女が去ったと思われる方向へと向ける。

「うわぁ！」

途端驚きの声が上がった。煩せえな、耳の奥に響く異音が不愉快だ。見るとそこには俺の手のひら位の大きさのガキがこつちを見て、腰を抜かしていやがる。

「よぉ」

搾り出したせいか掠れて幾分低くなった声がさらにコイツの恐怖を煽ったのか、ガキはその小さな身体をさらに小さくする。おまけに、背中のトンボの羽のようなモノをガタガタと震わせていた。

「わ…、オ、オイラは何にもしてないよ。だから、許して!!」

両手で頭を覆い隠しながらそう叫びあげる姿を横目で見ながら、何を許すっていうんだか？叫び声をあげるガキに俺は内心呟きを漏らす。

「ロイ？」

まだ俺の視界に、入って来ない所から声がかかった。ガキの声、コイツとは違う少しばかり細く、柔らか味のある声。

「サ、サ、サ、サリナ〜っ!!!!」

ピュンという擬音がそこいらに浮かんでいそうな様子で、ロイと

呼ばれていた羽根の生えたガキが飛び退っていくのを俺はただ目の端で追っていた。

「ロイ？なに？」

「ストップ！ダメだってこれ以上進んじゃ」

「でも、水」

「水なんていいから！」

「……くれよ」

何でもいい、あんなもつたいぶつたやり方じゃなく噎せ返るほどの水を今は注ぎ込まれたい。

「水、くれ」

二人の要領を得ない会話に割って入ると、サリナと呼ばれていたガキが俺の傍に座り込むのがやっと目に入る。

まだ、十を越えていない位だろうが、幼さが色濃く残る少女だった。

翡翠色の瞳に、柔らかそうな秋の稲穂を思わせるライトブラウンの髪、頭から耳からスッポリ被さるほどの大きさの帽子を深々と被っているが、たいした美少女だ。

サリナは俺の口元へと自分の手で掬ってきた水をそつと注ぎ込む。

「噛み付かれたらどうするんだよ！」

サリナの肩の上でロイがキンキンと喚いている。

なんで、俺が噛み付かなきゃいけないんだか…ったく。文句の一つでも向けてやりたいところだったが、口の中へと注がれる液体を嚥下させるのに今は忙しい。

「いたい？」

もう血も凝固してきている足の深い傷を見て、サリナは自分も痛そうな顔をして聞いてくる。

「痛いに決まってるだろーが。だから何だ？てめえが治してくれるっていうのか？」

最後の一滴を喉に流し込む、俺は浅く息を吐いてから一気にそう言っただけだ。

喉の渴きも癒え大分口も回るようになってきたな、うん。

まだまだ本調子ではないもののかなりきつめな俺の罵詈雑言を受けてもなお、サリナはキョトンとした顔でこちらを見ている。

そうかと思うと、元から小さな体はをひょいと屈めて投げ出されている俺の足の傷へと顔を寄せるとその傷口を……。

「おいっ」

「サリナ、バカ！！！！やめっ……」

ペロリと舐めたのだ。

ピリリとした痛みとザラリとした感触が這わされる。

何考えてるんだこいつは？頭おかしいんじゃないだろうか？というか、汚いとかそういう感情はないのか？

「いたい、なおった？」

呆気にとられながらその行動を見ていた俺に、サリナは顔を上げてこちらへとその瞳を向けてそう言った。

「はあ？治るわけねえだろ、こんなもん……で？いや、治ってる」

馬鹿にしたような口調が後半、まるっきりバカの口調になっちまったじゃねえかよ！

いやそんなことより、どういうことだ？足からは痛みが綺麗さっぱり消えている。それどころか傷口さえも閉じかけてきているなんて、こんな馬鹿な話が。

咄嗟に俺は険しい目つきで、すぐとなりに座り込んでいる少女を見つめた。

EPISODE : 02 (1 - 2)

「バカっ、サリナー！なんでこんな奴に力使ったりするんだよ、元氣になつて本当に食われちまったらどうすんだよ！！！」

「あなた、サリナたべる？」

ロイの力いっぱいの抗議の声を受け、サリナが少し不安げな目でこちらに向かつて問いかけてくる。

保護欲を掻き立てられるというのは、こういうことなのだろうか？魔族の俺でさえこんな気持ちになるのだから、普通の人間にはたまらないものがあるんだろうな。

変態親父とかに、そのうち攫われるんじゃないか、こいつ。なんか何も深く考えずにニコニコしながら普通について行きそうだな。

「おなか、すいてるの？」

答えない俺にさらに尋ねてくる顔があまりにも無防備で、その言葉に噛み付いて答えるのも面倒になっちまう。

俺は、上半身をゆっくりと起こしてサリナの方を見て面倒臭いが口を開いてやった。

「腹は減ってるけど、お前達は食わねえよ。特にその小っせーのは、マズそうだしな」

「失礼な奴！」

そう声をあげて反論したかと思うと、俺の視線を避けてロイはすぐにサリナの後ろへと隠れた。失礼って……食われたいのか？食っていいっていうならそれでもいいけどな。食えないことないし。

「ところで、お前さっきどうやったんだ？」

ロイは放っておいて、俺はどうしても納得のできていない疑問をサリナに尋ねた。

「なに？」

「足の傷口だ」

ああ、とサリナはやや考えた後にっこりと微笑んだ。

そして、俺の首にその小さな手を回し、左頬の小さな傷口に口付けた。柔らかな感触、湿った感触が俺の頬を舐める。

「ばかりっ」

途端ロイが、もう嫌だとばかりに首を振りながら絶叫をあげた。

「おねがいしながら、なめるといたくなくなるよ」

そんなロイに反して、両手を自分の前で軽く合わせてサリナはにこにこと実に嬉しそうに説明する。その言葉通り、頬の傷もまたその姿を消している。

冗談だろ？おい。そんな能力なんて聞いたことないぞ。

普通、治癒能力の多類は“精霊族”が得意とする所でその恩恵を受けた一部の人間が使うことができる。

まあ、俺たち魔族も使えないことはないが、本来“負”の力を源とする魔族はその性質が違ふ為、気休め程度のものでしかなくそれすらが使う治癒とはまた違う種類ものだ。

元々自然治癒能力が高い魔族にはあまり意味がないというのが、この能力が進化しなかった原因なのだろうが……。

だが、まあどちらにしても簡単な呪文や、どんな熟練者でも多少の精神集中は必要なはずだ。それを、ただ単に獣のようにペロつと舐めただけで治っちまうなんて聞いたことがないし、もしこいつが精霊族だったとしても納得がいかない。

「お前ら、精霊族か？」

「だったら、何なんだよ！」

こいつ、すぐビビルくせに妙に絡んできやがる。ロイを見て久しぶりに俺の中の悪戯心が、顔をもたげ始めた。からかって、遊ぶにはちょうどいい。

「サリナ、こっち来い」

俺は滅多に見せない満面の営業スマイルを浮かべながら、手招きをする。するとサリナは、主人に呼ばれた犬のように、嬉しそうな顔をして側までやって来た。

「なーに？」

「口ん中が切れてるみたいなんだけど、さっきみたく治してくれよ」
「うん、いいよ」

無邪気に返すサリナ。これが、どういふことが全くもって分かってないよな。この会話の意味を賢い奴なら、もう分かるだろう。

しかし、こいつ本気なんだろうか？ここまで、無垢だとさすがの俺でも多少の背徳感といおうかそんなものが出てきちゃう。

大体、この年でここまでの無邪気さって。俺が世間の一般的な子供ってやつを知らないだけなのか、はたまた精霊族の子供というの

は人とは違って粹なるモノしか持ち合わせ居ないのか。

「だぁーっ！バカー！」

ロイの絶叫、そして俺の口には……。

「へめえ、ひやまらっ」

しっかりと身体全体を使い、奴がしがみついて俺の口を塞いでいた。

「バカバカバカー、何考えてんだよー！」

「ロイ、ダメ！」

「ダメじゃないだろうー！！こっちの台詞だっつーの、おい！コラ！
！変態・ロリコン・エロ親父いゝ！嘘つくなバカヤローっ」

バカだ、こいつやっぱりバカだ。

真っ赤な顔をして怒り狂う顔が、あまりにも予想通りの間抜け顔で俺は久しぶりに声を出して笑った。

何やってんだよ、コイツ。

何やってんだか、俺。

さっきまで死に掛けていたというのに、腹の底が擦れそうだ。笑えば腹が痛かった、喉もまだひりひりする。それでも、何だか声を立てて笑いたい。

「何が、おかしいんだよ！」

笑いやまない俺に向かって、ロイはその小さな身体全体を使って

俺に怒鳴りつけてくる。その横ではサリナが、心配げにこちらを覗き込んだ。

「口、いたくない？」

「痛いわけないだろ！」

ぐいつと、人の口を両手でこじ開けながらロイはサリナに向かって説教を始める。

本当に食っちゃまうぞ、コラ。

「傷なんてひとつもないんだよ、よく見てみるよ」

いい気になって、そういうロイを俺は片手で握り締めて邪悪な表情を浮かべてやる。

「痛えよ、このガキ」

「わーわー、ギブ助けて！」

俺の手の中から逃れようと、奴は必死でもがく。手の平にこいつの羽根が摩れてくすぐってえ。

ふと、隣を見るとサリナが俺達の様子にどうしたらいいのか分からないといった顔で、こちらを見ていた。ったく、仕方ない奴だな……こっちのガキも。

「治ったから、もういい」

そう声を投げてやると、サリナは素直に一つ頷いて見せる。こいつは、何かに対して否定することってあるのか？素直すぎるっていうのも問題だろ？

なんにしても、このわけの分からんガキどもおかげで久々に笑っ

て疲れた。

笑うなんて行為自体、それこそ何年かに一遍あるかないかだったからな。ここ数年は、特にそうだったかもしれない。御陰様でというべきか、傷も癒えたし喉も潤す事が出来た。

そろそろ行くか。

俺はこんな所で呑気に笑っていられる状態じゃない。

今は死を免れたが、確実にそれは俺を付け狙ってきているのだから、安住の地など所詮ありはしない。

「はなせよー！はなしてっ」

ギヤーギヤー騒ぐロイを、手の中から開放してやって俺は立ち上がった。

「行くの？」

ふつと息を吐いたロイが、こちらを見ながらそう尋ねてくる。

「ああ、礼の代わりに教えておいてやる。この辺にいと柄の悪い魔族のあんちゃん達に食われちまうぞ」

軽く笑みを浮かべながら俺は親切に忠告をくれてやったのだが、この羽虫はとことん可愛くねえ。

「あんたの方が、よっぽど柄が……わーわーわーっゴメンナサイ！」

人の親切に対して憎たらしい口をたたくロイに、わきわきと手を握る仕草をする俺を見て、憎まれ口から一変して奴は声を上げた。

本当に色々忙しい奴だな。今度は、俺の様子を伺いながら遠慮がちに言葉を向けてくる。

「け、けど。ここなら平気だよ」

「あん？何でだ」

「ロイ“結界”はった」

サリナの言葉にロイは空中で両手を腰にあてふんぞり返っている、変なトコ器用な奴だ。しかし結界ねえ、そんな高度なもんをこいつが？

「お前みたいなチビが？」

訝しむように俺が言っていると、ロイは俺の鼻先までやってきて反論しだす。

「チビって言うなよ！！俺は精霊族の中でもトップクラスに入る程の腕を持った結界師なんだからな。一度張ってしまえばどんな魔族も人間も、その存在にさえ気が付かないって代物さ」

ますます調子に乗った様子で俺の肩の乗り、俺の首に片手で寄りかかり体重を預けながら言う。

絞め殺してやるうか、コイツ。

精霊族の結界の効果は、こいつらが滅多に姿を現さないってことで証明済みだが……。一族の全員が本当にそんな大層な能力を持っているのかどうかは、俺もよく知らない。

「でも“結界”あると、いどうできない」

サリナが、両手をパンと叩きながらにっこりと言った。

その言葉に俺は心中でこれでもかとはかりに叫び声をあげる。

使えねえなあ、おい。

俺が横目でそう訴えていると、ロイは遮二無二言い訳するように声を大にして言った。

「うっ、つまり場所を固定させて限定条件を付けることにより強力な結界がはれるんだよ。多少の弱い結界なら移動しながらでもできるさ、オイラだって！」

「ほーう」

頷いた俺に、満足気な笑みを浮かべるロイ。

アホだなコイツ、ベラベラと喋って警戒心つてもんをつけねえと騙されて身包み剥がされるぜ。

「って、しまったー！何オイラ、こんな得体の知れない相手にベラベラと説明しちまつてるんだあ！恐ろしい、なんて話術なんだあんた……」

「バーカ。全部自分でベラベラ喋ったんじゃねえか」

「うっ……なあ、あんた魔族なんだろ？」

一瞬言葉に詰まった後、口調を変えてやや真剣な声音でロイが尋ねてくる。

「あんたさあ。助けてやったんだから、その礼に隣の町までオイラ達を連れて行ってくれないかな？」

俺はただ黙って目を二、三度瞬かせた。

子供というのは何を考えているのかさっぱり理解出来ない、もっ

とも理解したいと思わないけれど。

冗談とも思えないような表情でこちらへ視線を向けてくるガキを見ていた俺の表情はというと、口に出すまでもなく呆れきっていたのだろうと思う。

EPISODE : 03 (1 - 3)

「助けてやったって、お前は文句ばかり言って俺に近付くなって
言っただじゃねえか」

「いいじゃんかよ！助けたのは事実だし、オイラがじゃなくてもサ
リナはあんたの為に一生懸命水運んできたんだぞ」

だから何でお前が偉そうにそんな事を言えるんだか。一生懸命水
を運んだという当の本人は何の事やら分からん顔でこっちを見てい
るというのに。

第一、コイツは人の話を聞いていなかったのだろうか。それとも
聞いても理解出来ないくらいの馬鹿なのか？

「俺は追われているんだ、こわーい、魔族のあんちゃん達にな。巻
き込まれて死ぬのがオチだぞ」

「大丈夫だって。あんたオイラ達二人連れて町に入ることくらいこ
の距離ならどうってことないんだろ？だったら、宿に入った時点で
そこに結界を張るよ。そうしたら、あんただって今夜一晩はゆっく
り眠れるってわけさ」

ロイの言葉に俺は、思考を巡らせる。

まあ、こいつの言っていることも一理あるとは思う。しかも一晩
ゆっくりっていうのはかなり魅力的な言葉だ。しかし、こいつの
結界とかいう奴がどこまで信用できるかどうかもわかんねえしな。

大体、俺に頼るってことはこいつらも何かに追われているのか？

「お前ら、どこに行くんだ」

「かあさんのとこ」

「どこだよ、だからそれは」

口を開きかけたサリナの口を先程俺の口を塞いだのと同じ要領で、
口は塞いだ。

「喋るな。喋らなくてもいいことだろ、それは」

この台詞にはサリナも納得したらしく、反省した顔でコクンと一
つ頷いてみせてからこちらへと、向き直って頭を下げた。

「ゴメンナサイ、いえない」

「そう！言えない！！」

お前が踏ん反り返る必要がある？と突っ込みたかったが、
止めておいてやろう、面倒なだけだ。

まあ、わかったことはこいつらも単なるお気楽旅行って訳じゃな
さそうだってことだけだが。なんにしても、面倒なことがこれ以上
増えるのは御免だしな。

こっちは、一つ。

「んじゃ、断る。達者でな」

「ちょーっと、そりゃあないだろ、旦那！！」

「お前の旦那になった覚えはない」

「いいから、話を聞けってば」

「めんどい」

「ダメ親父いっつ！！！！」

スタスタと歩き始める俺の周りを羽虫のようにブンブンと、そり
ゃあ煩く叩き落してやったらどれほどすっきりするかと思うほどに

飛び回るロイ。

煩いんだよ。これ以上こんなお気楽ムードになんて付き合っていられるかっていうんだ。

「いつしょ、いく」

くいくいと俺のぼろぼろの上着の裾を引っ張りながらそう言うのは、いつの間にか自分の身体と同じくらいのでかさのリュックサックを背負ってきたサリナだった。

「お前、どつからそんなもん持って」

っていうか、いつの間に取りに行ってたんだよお前。

呆れるを通り越してその素早さを他に生かせよと思いながら、目の前にいるサリナへと視線をおとしてやる。ここまで来るのに走ってきた為なのだろう、やや息を弾ませながら俺を見上げていたサリナと目があった。

「そんな子供のいじらしさで迫ろうつたってなあ、そうはいかねえぞ」

後になってみれば何故この時、続けざまに否定の言葉を叩きつけてその場を立ち去らなかつたのか不思議に思う。

俺は情に厚い方ではないし、元来情などというものも持ち合わせではない。走り去ってしまえばいい、出会わなかつたと背中を向けてしまえばいいのに。

翡翠色の二つの瞳が俺をそこに縫い付けていた。

「サリナー、もう一息だ。そのまま悩殺してしまえ！」

「いけないの？」

首を傾げてこちらを見る仕草は、ぶっちゃけ可愛いと俺も思う。計算しながら愛敬を振りまく女どもは嫌っていうほど見てきたし、それなりの対応も知っている。だが、子供の無垢な瞳っていうのはそれとは、全然違う。

やや下方にあるサリナの瞳から視線を逸らす。子供から逃げているようで、それはそれで気に食わなかったが、これ以上どうしたらいいのかが分からない。

「見返りがなさ過ぎるだろ」

さんざんつばら言い訳を探して、出た言葉がこれだけとは我ながら情けなかった。

「いいじゃないかよあ、ちょっとくらいさ。借りを返すと思って！……じゃねえとサリナ泣くぞ」

ちらりと横目でサリナを見る。盗み見たつもりが、その馬鹿でかい目と目が合う。

俺は一つ深いため息を吐き出して言った。

「ちつ、面倒くせえな」

わかったよと俺は小さく付け加える。

別に泣かれるのが、嫌だったわけじゃない。女子供の泣き声なんて戦場じゃ嫌って言うほど聞いてきたのだから。

ただ。

ただ……何故なのかはわからない。

もう少し、このボケコンビに付き合ってやってもいいかなんて、

柄にもないことが脳裏をかすめちまった。

サリナに借りがあるのも本当だし、こんな状況だから何時あの世からお迎えが来てもいいように、慈善事業でもしておくのも悪くないだろう。

「いく？いつしょ」

「ああ」

仕方ねえなと付け足しながら頭を掻いた俺の答えを聞いて、サリナは瞳を輝かせる。深い緑色がまるで宝玉のように光を放っていた。

「アナタなまえは？ワタシ、サリナ＝ルリン」

知ってるっつーの。

姓は今初めて聞いたけどさっきから名前呼んでるじゃねえか。今更ながら自己紹介を始めたサリナに俺はがっくりと肩を落として脱力する。

名前ね、名前か。

「どうでもいいじゃねえか、そんなもん」

「良くないだろ！教えろよ」

ああ、うるせえ。ロイが喚きたてている。

名前なんか知らなくなつてどうってことないだろうに……。

そんなものはただの名札で呼称で単に呼びつける為のツールに過ぎない。

「教えてくれないっていうんなら！」

ロイがピヨンとサリナの肩に乗り、こちらを指差す。

「サリナにお前の名前を、名をロリコン！姓を親父！名づけてロリコン！親父と教え込んでやるゝ！！」

はあ？ちよつと待て！

するってーとあれか？俺はこの無邪気な声で、笑顔のまま常にこいつに“ロリコン親父”って、呼ばれなきゃなんということか？！洒落にならん、本気で洒落にならん。

ぶるぶると馬鹿げた想像を振り払った俺は、結局のところこの脅し文句に奴を握り殺してやりたいくらい悔しいが、屈してしまうことになった。

「……カルマだ。姓はない」

観念したように吐き出す。自分の名前を名乗ることなんか滅多になかった。

呼称。

誰かのモノである、証。

それだけのものなのだから、それが名前だろうが番号だろうが所詮同じことだ。

名前なんか覚えても明日にはそいつが生きているかどうかかわからない。

そんな生活がやっと終わったというのに。

（カルマ）

俺は自分の名前が好きじゃない。それは、俺があいつの所有物であるという証だから。

「カルマ」

ぼうつと、思考が飛んでいる時に斜め下からサリナがそう呼んだ。

「何だよ」

我ながらぶつきらぼつに返しながら、サリナの前髪で隠れたデコを軽く指で弾いて押してやる。

それだけで、サリナは荷物の重みのせいもあるのか、元々とろくさいのかは分かんが、ペタンと後ろへとひっくり返るように座り込んだ。

「バーカ、行くぞ」

「うん」

すつころんだままの体制でサリナが返事を返す。

バカなガキ。

俺はそのまま荷物ごとサリナの身体を抱えあげた。仕方ねえな、

次の町まで面倒みてやろうじゃねえか。

耳元でロイが騒ぎ立てている。煩せえな、何で死ぬか生きるかの瀬戸際でこんなガキどもを拾って子守までしなけりやならないんだか。

「空、あおい」

サリナが空を見上げながら、声を上げる。その声に導かれるかのように、俺は空を見上げた。体中がまだ悲鳴を上げているというのに、酷く呑気で穏やかな情景に目を細める。

青い空に、季節にはまだ早い稲穂に似た色が目の端に揺れていた。

EPISODE : 04 (2 - 1)

二匹のガキどもは大丈夫だと安心してはいたが、それでも俺の体には長年の染み付いた用心深さが染み付いていた。ロイ達が望む町に入るのに一番距離も近く、人通りも少ない道を見つけると、全速力で森を走り抜ける。

結局走ることになるんだな、そんな事がふと脳裏を掠めた。

しかし、水と少しばかりの食料を口にしたせいなのか、ぶっ倒れた時の数倍の速度で移動することが出来た。

奴らが追ってくる気配はなかったが、それでも速度を落とすことはない。

俺の腕に荷物と一緒に抱えられたサリナは何を勘違いしているんだか知らないが、きやつきゃつと声を立てて喜んでいる。

そうかと思うとロイは俺の髪にしがみ付きながら始終「落ちる」だの「怖い」だの騒いでいやがつて、煩いったらなかった。

距離がもう少しあれば、俺も我慢の限界で振り落としてやったのに、運のいいヤツ。

町の入り口に人気のないのを確認して、俺はサリナを降ろし自分の姿を変える。

俺の今の姿は魔族といっても非常に人間に近いもので魔族を良く知らない人間が見ればれることもないかもしれないが、魔族としての特徴的な金の瞳や人間の喉なら簡単に掻っ捌けるような鋭い爪など、ごく一般的に知られている魔族の身体的特徴は当然俺にもあるのだから、ヘタな騒ぎを起こすよりは無難だろう。

また、身体的特徴とはまた違ったものどこと問われれば答えにくい、自然滲み出てくる魔族臭さというものを隠す為にも自らにある程度魔力封じもかけてやる。

とは言っても姿を変えたところで、俺の美貌は衰えることはないけどな。瞳の色は金色から薄茶へと色素を落ちてはいるがこのつり上った切れ長の目、整った鼻筋。

ま、正義の味方とは口が裂けても言えないが絶世の美形悪役顔といえ、俺のことだろう。

いいだけ伸びた漆黒の髪は、腰のあたりにまでなってきた。つい数時間前までは形振り構わず走っていたせいで、かなり酷い状態になっているのは否めない。

「カルマ、みて」

「んー」

「人いっぱい」

「はぐれんなよ」

きよろきよろと町の中を見回しているサリナがあまりにチビつく、どこかに消えてしまいそうで、思わず俺はその小さな腕を掴んで歩いていった。

何処からどうみてもこれじゃあいたいけな少女と人攫いだ。ロイはというとサリナの懷に忍び込み時折文句だけは訴えてくるのだから、面倒で仕方が無い。

「つたく」

その宿はあまり立派とはお世辞にもいい難い所だった。

しかし、一階は酒場兼飯も出してくれるという結界の範囲があまり広くないため、行動範囲がある程度規制される俺達にとっては都合のいい宿だ。手続きと前金の支払いをサリナの代わりに金を受け取って済ませ、部屋へと入った。

「ふいー、やっと着いたあ」

部屋に入るなり、町の人々から身を隠していたロイがサリナのパケットから飛び出して来た。んーっと、大きく一つ背伸びなんかしてやる。

「着いたのは分かったから、とつと結界とやらを張れ」
「分かつてるよ！もう、せっかちなんだから」

俺の言葉を受け、ロイは窓枠へと静かに降り立った。
その後、ロイは何やら俺には理解できない呪文を唱え始め、精神集中を始める。

途端に、奴の身体が緑色に輝きそれがどんどんとロイの小さな身体から広がっていき、宿全体を包んでいく。窓から下を覗くがこの光に、他の奴らは気がついていないようだ。光はどんどんと拡張し宿を余すことなく包み込むと、それは一気に消えた。

「これで終了〜！」

呆気ないほどの速さと、楽天的な声で締めくくられたこの儀式を見て、俺は不安を覚える。本当に大丈夫なんだろうな……こいつの結界って信用していいのかマジで。

そんな疑惑の目を向けている俺に気がついたのか、ロイは不満げな表情で声をあげた。

「なんだよ！その疑いの目は、感じ悪いなあ。俺の結界は精霊界一なんだってば！！」
「へいへい」

まあ、今更どうこう言っても始まらないからな、一応信じてやることにしよう。俺は決して上等でない寝台の上に腰掛けた。

数ヶ月ぶりの柔らかな感触にどつと疲れが押し寄せてくる。

「サリナ？あーあ、寝ちゃってるよ」

ロイの言葉で声のした方に目を向ける。静かだと思ったら、サリナは隣の寝台の淵に寄りかかりながら床に蹲り寝息を立てていた。

「まったく、荷物も背負いっぱなしじゃねえか」

俺は親切にもリュックをサリナの背中から引っぺがし、帽子に手をかけようとした。

「ストップー！レディに気安く触るなよ」

その時ロイが慌てた様子で、目の前に飛び込んできた。

「何がレディだ、ふざけんな。お前の結果とやらの範囲がもう少し広ければ部屋をもう一つ押さえられたんだよ」

「そ、それは、悪かったと思うけど。でも、宿代はオイラ達が払ってるんだから！これでイーブンだろ」

コイツがサリナに異様に執着してみせるのは、出会った時には分かっていたことだ。だが、ここまで過剰に警戒するんなら一緒に行こうなんて誘うんじゃないよ。

まあ、ロイが大声張り上げて口に行っている事がまっとうだとは俺も思うのだが。

「今更ここでお前等に危害加えようとは思わねえよ」

「……うん」

「まあ、いい。触るなってことは、そいつ床に転がしといていいんだな？」

ロイの大きさじゃサリナを持ち上げて寝台に寝かしつけるのは難しい。もつとも、サリナを起こして寝台へと導くくらいなら出来るだろう。俺だって余計な世話を焼かずに済むものなら、このまま瞼を閉じて夢路へと出かけたい。

「あ、えーっと。寝台まで手伝ってくれないかなー？」

えへへっと芝居がかった笑みを浮かべながらそう言ったロイを、俺は眼光鋭く睨みつけてやった。途端、びくんと奴の体が戦慄く。

「都合がいいこつたな」

「だって、起こすの可哀想だし」

「どけ」

いちいち文句を言うのも疲れた。

コイツは忘れているかもしれないが、俺は今日一度死にかけてるんだぞ。死を覚悟して見たくも無い過去の回想とかを一度してきているんだから、素直に休ませて貰う。

片手でロイをどけてやると、ひょいとサリナの体を持ち上げ寝台の上に乗せてやった。多少の衝撃はあったのだろうが、夢路を一人行くサリナに起きる気配は微塵も無い。

「ありがとう、カルマ」

「別に、どうでもいい。それより、帽子くらいとってやれよ」

「いや、いいよ。帽子はそのままで！うん」

「はあ。なんでだ？」

「何でも」

別に、理由なんかどうでもいいし、さして気になるわけでもないが、気に食わない。睨みつけるようにこちらを見ているロイに俺は

あっさりと告げた。

「わかった」

俺は納得したように頷いて、帽子に向かっていた手を一度ひっこめようと思わせて、そのままぐいっとな帽子ごと引っ張りそれを筆取る。

「だっ、だめだってば!」

ロイの声だけが虚しく響き、サリナの長い髪がサラリと落ちる。
そして、そこには……。

EPISODE : 05 (2 - 2)

「……なるほどな」

誰に聞かせるという風でもなく俺は呟いていた。

これは隠しておきたいと思うのが普通だろう。俺がロイの立場でも隠す。

サリナのその流れるライトブラウンの髪からチョココンと飛び出している耳。それは、通常の人間のものでも精霊族のものでもない。

エルフ。

特徴的などがった耳はエルフの証だ。

そもそもエルフっていう奴を見たのは俺も初めてだが、翡翠の如く輝く緑色の瞳に、絶世の美貌そしてこのとがった耳。エルフの特徴として伝えられているものの全てにサリナはクリアしている。

それは、つまり。

「バレてるよね、もう」

ロイがどこか観念したような唸り声を漏らした後、そう言った。

「案外ベタな展開だな」

寝台の上で足を組みながら、俺は何処か冷めた目をしていたように思う。

「そう、結構世の中にはベタな展開が溢れてるんだよ」

「ご都合主義で宜しいこつた」

「なら、もつとご都合主義でいけばいいんだけど」

小さな肩を竦めながらロイがそう口にしたのをきっかけに、俺達は淡々とした口調で会話を交し合った。

ロイの性格からして、もつと騒ぎ立てるかと思っただが意外だな。

否、意外というほど俺はこいつ等を知っているわけではない。

何処か冷めた空気がそこには横たわっていた。

「分かってると思うけど、サリナはエルフだよ」

「なんだって、エルフがこんな所にいるんだ。大体奴等は山中なんかにて滅多に他の種族に姿を現すことなんかはずだらうが」

それ故に、エルフは伝説の種族と言われるのだ。

エルフ。

精霊族の中でも温厚な気性として知られ、体力的な力こそ常人ほどないものの、魔力の高さ技術の精巧さは他の種族とは比べられないほどのそれこそ別格な力を持つと言われている。

しかし、その一方で滅多に人や魔族には姿を見せずひっそりと山中、他の精霊や動物達と暮らしていると言い伝えられている種族。

「緊急事態なもんでね」

「親に会いに行くのが？」

俺のその問いに考えあぐねた上で、決心したようにロイはその小せえ顔の中にあるでかい目をこちらへと向けて言う。ぎょろりとした目玉はサリナの翡翠色に対して深い紫色をしていた。

「この話を聞いたらあんだ、オイラ達の旅に協力してくれるか？」

「話が飛びすぎて見えねえよ、なんだって？」

不機嫌な俺の言葉に、ロイは冷静な様子で台詞を吐き出していく。

「あんたは、何者かに追われている。それは魔族だ」

「それがどうした」

こいつが身に纏っている空気は先程のものとは全く違うのが分かる。

明らかに何かを探っているような、勝負をするべき時に纏う空気。その真剣さに俺もまた、チビだからって油断がないように奴を軽く睨みつけながら問い返す。

「あんたは自分を追っている奴らを倒すだけの力を持っているにも関わらず、決して自分から敢えて攻めにまわろうとはしない。逃げ延びるのが目的なんだろ？」

ロイはズバリ俺の現状を言い当てながら、尚も言葉を続ける。

「ズバリ言う。オイラ達が向かうのはエルフの隠し集落だ」

その単語に、さすがの俺も返す言葉が咄嗟に出てこない。

先も述べたように、エルフという存在自体がそもそも伝説に近いのだ。エルフの集落など、それを考えれば見つけることはあの世を見つけるのと同じくらい困難だと言えるだろう。

「そこにサリナを連れて行けば、あんたもエルフの集落に匿ってもらえるだろ？」

つまり、その為に引き続き俺にこいつらの世話をしろってことだ。

随分勿体ぶったもんだが、まあ悪い取引でもない。

エルフの魔力は強力だ。そいつらに恩を売っておけばいざという時何かの役には立つだろう、それにロイがいれば結界もある。

俺には時間が無い。

だが、逆に言えば俺は時間が欲しい。

時間が必要なのだ、数ヶ月でいい身を隠しておけるだけ時間が。

「どうだい？」

ふん、チビが一丁前にこの俺と取引しようなんてな。

「やっぱ、口軽いわお前。ここまで聞いて俺がお前らを他の奴にうつぱらったりしたらどうするんだ？」

世の中の全てが自分の思い通りに行くとは限らないのに？

誰かを信用して生きていくことなんかできない。誰かを信用したって、いつかは裏切られるのだ。結局自分の事が人も魔族も皆大事なのだから。

「オイラもそう思うけど。サリナは、あんたの事気に入ってるみたいだし」

言いながら、ロイは最後の台詞を小さくそう言った。そして、堂々とこちらに向かって啖呵を切る。

「まあ……いいんだよ、そんなことはどうでも」

その台詞はまるで自分に言い聞かせるような響きだった。

ロイの小さな体が一度ぶるりと奮えたのが分かる。覚悟を決めた

紫紺の瞳はあまりに深くて何を考えているのか俺にも読み取れない。
ただ一つ分かるのは、生半可な気持ちでこいつが言葉を紡いでいるんじゃないってことだ。

「今更どうこう言っても仕方ないだろ？今の状況でごまかしたってバレルものバレルんだ。これは、取引だ。それこそさっきの言葉じゃないけどイーブンな、ね。それでどうするんだい、カルマ？」

聞くのか聞かないのか。
乗るのか乗らないのか。

俺は、ロイを摘み上げて自身の肩先へと乗せて頷く。こういうのは嫌いじゃない自然口の隅が持ち上がるのを俺は感じていた。

EPISODE : 06 (2 - 3)

「いいだろう、話なチビ」

「サリナはエルフ。この森の西の一族の子供さ」

「エルフっていうのは集団で暮らしてるんじゃないのか？ガキがガキに連れられてこんな所でウロチョロしていいのか」

観念したかのように、ポツポツとロイはそう言葉を紡ぎ出し始める。俺の質問に、眉根を寄せてキツイ口調で言い返してくる。

「良くないよ！！ただ、その緊急事態というか……サリナはさ、狙われてるんだ」

言葉尻に向かうに連れてその、語調の勢いは衰え最後には呟きにも似た大きさをそうロイは口にした。

「狙われてる？」

その言葉に俺もまた眉根を寄せながら聞き返す。

「エルフが不死だって事は知ってる？」

エルフに関する情報は少ない。

否、少ないというよりは端的に限られていると言った方が正しいのかもしれない。絶対的な魔力を秘めた麗人、永遠の時を生きる者。

「ああ」

「けど、不死っていつでも殺されれば死ぬんだよ。つまり自然の状態で老衰はありえないって事で……傷付けられれば痛いし、酷ければ死ぬ」

何が言いたいのかが、分からない。

今更エルフの生体について説明された所で、俺には関係のない話だ。しかし、今この状況で話すってことは無関係な事でもないんだろう。

そう考え、俺は奴の話に特に言葉も挟まずに黙って話を聞くことにした。

「エルフの血肉は薬になる」

サリナの方へと愛しげに視線を向け眼を伏せた後、こちらへと向き直りロイはどこか感情を押し殺した事務口調できっぱりと俺にそう告げた。

「そういう言い伝えがあるのさ。エルフの血肉を食らえば難病もたちどころに治るとか」

「聞いた事はある」

そう、聞いた事はあった。

しかし、それはあくまで噂……いや、伝説程度のレベルの話だったはず。確かにエルフは他の種族よりも格段に高い魔力と治癒能力を秘めているし、不死の命ももっている。

それだけに奴らは不用意に魔族や他の種族においそれと姿を現したりなどしないのだから眉唾もんだと思っていたし、それが大方の世間の意見だろうと思う。

だが、先程のサリナの能力。

あれを見てしまった者がいるとすれば、伝説を真実と結びつけてしまったとしても何の不思議も無いだろう。

己の体液とほんの少しの魔力だけで、あれだけの回復能力を発揮できるのだから。

「くだらないよね！けど、エルフ達は西の森を出てそんな馬鹿げた騒ぎのない別の森へと一族全員と、数種の精霊族を連れて移住する事にしたんだ。その途中、人間達に見つかってオイラ達は他の仲間とはぐれちまったってわけさ」

つまり、そういう人間達にサリナは狙われているって事かな。なるほどな、エルフの成人の集団を狙うよりは子供一人狙った方がリスクは低くて済む。

「なんとなく、分かってくれた？」

「察しはついた」

尋ねてくるロイに俺は短くそう返すとどうしたものかと、目を伏せた。

エルフという存在。

それは、一種神がかったものでもある。自分が恵まれていないと思えば思っただけそういう存在が疎ましくなるのだろう、自分よりも幸せに見える。

自分よりも幸せなモノ、その全てをぐちゃぐちゃにして奪い去りたくなる。それが、人間だ。皆、どの人間も本質なんか変わらない。なぜ、妬みで殺す事ができるのか？

羨む心は何を生むのか。

「くだらねえ」

魔族が殺す理由は違う。

生きるため。

快樂のため。

殺るか、殺られるか。

自分よりも、恵まれたものからなら奪ってもいいという考えがいかにも自分を正当化した弱者ぶった人間臭い考え方に虫唾が走った。どいつもこいつも人間なんていうのは、そんなもんだ。

（なあ、カルマ）

ずわりと背中に何かが駆け巡った。思い出したくも無い声が耳の奥で鳴っている。

でもまあ、この種族に関していえば血肉を食らってその力が手に入るというのが真実ならば、魔族はもちろん様々な種族が奴らを欲しがるだろうけどな。

なのに、こいつらエルフが全滅しないで今も存在しているっていうのは一重に、それらに対抗するだけの絶大な力を誇っているからだろう、つまり……サリナにだってそれくらいの力があってもおかしくない。

「自分の身も守れないのか？」

「無茶言うなよ」

ロイが不満だらけの声でそう言う。

「サリナはまだ子供なんだぜ。あんだだって、昔から強かったわけじゃないだろ？しかもエルフっていうのは元々戦闘向きの種族じゃ

ないんだからさ」

「で、俺にコイツとお前を親元まで届けろって？」

「そーいう事」

ロイの返事に俺は思考を飛ばす。

コイツの言葉を鵜呑みにするとして、相手が全て人間なら特に問題は無い。けどなあ、本当に人間だけですむのかはすっげえ疑問符がつくぞ。

まあ、単なる人間が雇った程度の奴らなら特に問題もないか。俺一人でいるよりは、こいつらでも目くらましくらいにはなるかもしれないしな。

イザトナレバ、捨テテ行ケバイイ。

重イ荷物ハ、投ゲ捨テロ。

昔戦場で伸ばされた手に目を伏せたように、その手が大きい小さいかの違いしか所詮はないのだから。

生きて、俺は伸ばされた手ではなく自由を掴む。今度こそ、何も逃さず俺だけの自由を掴み取ってやる。

その為の犠牲など惜しむ気もない。

「いつしょ」

まだ夢見心地のまま、そう俺の名を呼んでその小さな手が俺の裾をそつと引いた。

「付き合ってやるよ」

ため息交じりに俺はそう呟いた。

今はとりあえず、この伸ばされた手を振り解かないで置いてやる。

俺から、掴む事はないその手。

何時振り払う事になるかなんて分からないけどな。
しっかり、掴んでおくんだな。

EPISODE : 07 (3 - 1)

「疲れた〜っ、まだ次の町に着かないの？休憩しよう！カルマっ、きゅーけー！！！」

俺の耳元でロイが四六時中文句をたれていやがる。

握りつぶしてやりたい衝動を必死に抑えつつ俺は目だけで奴を睨みつけてやった。

「少し黙ってろ！煩せえぞ、小虫」

「小虫って何だよ！小虫って！」

「小虫じゃなけりゃ、羽虫だ。お前、その辺の人の群れに放り込むぞ」

夜が明けて、東の森へと向かう事にした俺達は早朝に必要な類の物の買出しを済ませ町を後にした。

いつ何処で襲われるとも分からない状況で、俺はあえて人通りの多いところでの奇襲を避けるか、はたまた何かあった際に何の気兼ねも無く暴れられるよう、人通りの少ない裏街道に行くか悩んだ結果、後者を選んだ。

理由としては、三つ。

一つは、このガキどもは他人に甘い。

俺は誰がどうなるうが関係ないが、恐らくそうなった場合煩く騒ぎ立て面倒な事になるだろう。

二つめは、最初に述べた事にも付随するのだが……。

こいつ等はこいつ等で追われているわけで。何かあった際に、サリナの素性がバレた時は二重にも三重にも厄介事が増える恐れがある。

最後は、奴等に常識なんて通用するかどうか分からないって事だ。人通りがあるうが無かるうがそんなの関係無いつて感覚の持ち主なら、何処に居たって関係ない。

いくら人通りが少ないとはいっても、全く人が居ないわけではない。その人の為、昨日のようにサリナを抱えて走り抜ける訳にもいかず。

まあ、昨日くらいの距離だったら俺も人気のない道走り抜けていけばいいんだがこれだけ距離があるとそういうわけにもいかんしな……結局、次の町までは歩きという結論になる。

「お前はさつきから、俺やサリナの肩に乗って休んでばっかいるじゃねーか」

「そんな事ないって、ちゃんと飛んでるし」

「どんな自慢だ、そりゃ」

「あんた歩くの早すぎるんだよ！サリナが可哀想じゃん！」

「リーチの差だろ、諦めろ」

面倒くさげに、あっさりと言いつつ俺。

それに対してロイはまだあーでもないこーでもないとかちやごちや声を上げている。……ああ、煩せえ。本気で握りつぶしてやろうかこのチビ。

確かにロイの言うとおり俺が少し早足で歩くと、サリナは後ろから小走りで追ってくる形になっていた。

だが、俺はこいつらを守って東の森までは連れて行ってやるって言った。

が、しかし。

ガキの面倒までみると言った覚えはない筈だ。大体、もつと早く歩いてえのを、ある一定の間隔以上の距離が開かないようペースを守ってやっていることを感謝して貰いたいもんだ。一人なら、もつとちゃっちゃつと歩いてるぞ。

「あのなあ」

立ち止まり、目の前をパタパタと飛んでいる羽虫野郎に一言くらい言っただろうと口を開く。

「なんだよ!!」

一丁前に言い返してくるロイに、眉を吊り上げ罵詈雑言をかましてやろうとした瞬間。

俺の右足に後方から、どんつと何やらぶつかる感触が伝わってきた。

視線をそこへと向けると案の定、はあはあと息を切らせながらもニツコリとこちらを微笑みながら見上げてくるサリナがいた。

頬は桃色に染まり、額にはうっすらと汗までかいてるじゃねえか。帽子にかぶられている様子のサリナ。

人の気も知らねえで、ったく。

「いかないの？」

ああ、なんなんだコイツは！

痒い、全身がむず痒い。何だっただコイツはこんな目で俺を見るんだ。何もかもを安心しきって任せているような態度に腹が立つ。

俺はいつでもコイツを殺せる。

理由も無く、ただ苛立ったという理由だけで。
そんな事も知らないで、約束？契約？そんなものは俺がこの世で一番嫌いな言葉だ。

「カルマ？」

俺の名を呼ぶな。

未来永劫血に塗れた道を首輪を繋がれたまま歩いていけと名付けられた、その名を。

サリナが俺の名を呼ぶたびに、俺の何処かで血が流れているようだ。塞がりかけていた傷口から脈々と暖かいモノが流れ出す感覚。

「休憩だ」

俺は片手で顔を覆って、それでいいんだろう？と半ばヤケのような口調でそう叫んだ。

ロイはにやつと口元に笑みを浮かべたかと思うと、次の瞬間にはもうサリナの肩へと飛び移り甲高い声をあげている。

「サーリナ、休憩だってさ。やったー！」

こくと頷いて、サリナは街道の横に広がっている草むらに腰を下ろす。そんな様子を見ながら、俺も近くまで歩みを進めた。

そっぴや、エルフっていうのは体力が極端にないんじゃないかな？ってか？文句の一つも言わないでついてくるから平気なのかと思ってたが。

リュックから水筒を取り出して勢い良くそれを流し込んでいる様子を見ると、結構限界に近かったのかもしれない。

「サリナ、足痛くないか？」

「だいじょうぶ」

ロイが心配げに尋ねるが、当のサリナはけろっとしていつものように返事をしている。エルフには、妬むとか憎むとかいった感情はないのだろうか？

サリナを見ていると不意にその白い首筋を締め上げて恨み言の一つも吐かせてみたくなる。

こうであつて欲しいという清らかな存在。

それを全てこの手でぶち壊してみたいくなる。

黒く黒く、染め上げて原型さえ留まらないほどに。

薄汚い人間と同じ感情が、俺の中にも存在する。否定のしようもないほど、俺はやっぱり汚れているから。

俺の視線に気がついたサリナが、腕を引いた。

どうやら、俺も隣に座れという事らしい。

付き合つてやるか、仕方ない。俺はその誘いを受けサリナの隣へと腰を下ろし、そのまま寝転んだ。

俺は今、俺が不思議でたまらない

なぜ、俺はこんなガキ達と一緒に旅をしてもいいと思ったのだろうか？昨日まで見上げていた空は、死をも覚悟していたというのに。

「空は、青いんだっとな」

自然漏れた呟き、いつからかそんな事さえ忘れていた。昨日担ぎ上げたサリナが上げた言葉をなぞる様にして俺は口になっていた。

空は青い。

俺の隣ではやはり柔らかかそうな麦の穂にも似た髪が揺らめいている。

今も状況は何一つ好転などしていないというのに、この心の余裕はなんなんだろうな。

風が、草を凪いでいく。

心地よさに瞳を閉じた。

だが、瞼を下ろしたのは失敗だったようだ。自ら作り出した暗闇は見たくないものを運んでくる。しかし、そんな時は不思議なもので一度作り出してしまった暗闇は中々自らの意思では振り払えない。

隣にはサリナとロイがいるはずなのに、まるでこの世界に俺一人のようだ。

音さえ俺を見捨てて去っていったかのような錯覚。

（カルマ）

しゃがれた声ではなく、奴が若かった頃の声で俺の名を呼ぶ。神経の全てが俺の脳内が作り出した主人の姿を思い出させた。

EPISODE : 08 (3 - 2)

俺があの人と出会ったのはもう60年以上昔の話になる。

その頃は、ちょうど魔族狩りが流行していた頃だった。狩りと言っても、殺すのが目的ではない。魔族を捕まえ、自分と主従契約を結ばせるのだ。

この主従契約というのが厄介なもので、ある程度の魔力を持つものが自分の肉体の一部を主従を結ばせるものに与え、その身体のある部分へと印を刻む。

たったこれだけのことで、契約は完了となるわけだ。

これが成立させられると、身体機能として主人となった者には危害を加えることができないうえに、自らの意思で命を断つことさえできない身体になる。

おまけに、主人が自然死・もしくは自らの意思で命を落とす場合を除き、いかなる場合でも、主人が命を落とせば契約を結んで守護^{ガード}となった者の命も同時に奪う。

この契約が破棄されるのは、主人が自然死もしくは自殺するか、主人本人が契約を破棄させた場合のみとなる。

まあ、他にも色々と制約やら何やらがあつたりもするのだが、細かい事はいいとして。そんなわけで、人間は魔族を自分のガードにという馬鹿げた遊びに躍起になっていったってわけだ。

ちなみに、この契約同族同士では結べない。確かに面白いゲームであり、その者の力量と地位を満足させるだけの価値はあつた。

人間・魔族・精霊族とこの世界は大きく分けて3つの一族で構成されているが、その中で滅多に姿を現さない精霊族ではなく、人は魔族に目をつけたってわけだ。

魔族の寿命は長い、精霊族ほどじゃないがな。あの頃の俺は、まだ何の力も持たないくせに、何でもできると思っていたガキだった。そんな時、奴に捕まりガードになったのが運の尽き。

当時、ある一国の軍事を仕切っていたジェロームは俺を軍事兵器として使った。戦う相手は人間と、俺のようにガードとなった魔族達だった。

「死にたくなかったら勝って来い」それが奴の口癖。

死にもの狂いというのは、ああいうことを言うのだろう。次々と補給される兵器としての同族達、元々俺達に仲間意識というものは薄い。それでも、その日ごとに運び出される死体と、次の日にはもう見知らぬ者が倒れている現実には、さすがの俺も気が狂いそうだった。

運ばれていく姿。

面倒くさそうに墓穴とも呼べぬ洞穴に蹴りこまれていく肢体。

イヤだ、ああなるのだけはイヤだ。

ただ、死なぬ為に戦った。

あの中に放り込まれる悪夢を見ぬ為に、ひたすら両手を血に染めた。

仲間なのか敵なのかそんなことはどうでもいいと、戦場では自分の命だけを守るように血を浴びてきた。いつしか、この悪夢から開放されることを夢見て。

そして、あれから60余年……俺は強さを手に入れた。

ジェロームの命令以外でもただひたすら能力を高め、もはや誰にも負けぬ最強の守護神とまで言われた。

笑い話だ。

傑作すぎて、言葉もでねえ。

何が守護神だ？

かつての同族達は誰一人残っていない。

俺はただ生き残っただけ。

ジェロームは、俺が成長していくのと対照的に老いていった。当たり前といえば、当たり前のことだ。

俺は、戦場から帰ってきて「自由」という言葉が見え隠れするようになってからは、より一層自分を鍛えた。そこには何かが待っているはずだ、あの悪夢はもう襲ってはこない、俺に待っているのははっきりと口を開いた空洞ではない。

時が来れば、俺はこの呪縛から解き放たれると、本気で信じていたから。

そして、事は一月ほど前になる。

ジェロームはこの頃になると、体中にがたがたきているようだった。昔の軍師として面影はその身体にはもはやなく、何度も夜中に医者駆け込んでくるような状態にまでなってきた。

そんな時だ、奴の口癖が変わった。

（お前はズルい、お前だけが生き残る）

そんな戯言を毎度のように繰り返し聞かされる日々がしばらく続いた。モノを投げつけられたり、ある時は力任せに殴られたりする日もあったが、それも俺にとってはもはや苦痛では無かった。

むしろ、そこにあったのは空虚感。

何てちっぽけで哀れな生き物なのか、どうしてコイツに俺を縛るだけの力があるだろう。

（お前だけが自由になんて）

ある日、部屋に呼び出された。その日の奴の口調は明らかに異常だった。

（何故？お前だって散々その手を血で汚してきたじゃないか。お前だけが自由になんて、許されるはずがないのに、許されない……そう許せるはずが無い）

前半ぶつぶつと言っていたかと思うと、目を血走らせてこちらを睨み最後にはそのしゃがれた声を張り上げた。

刹那、扉から数人の魔族が身体中から殺気を漲らせて入ってくる。俺は同時に軋む床を蹴り上げ奴らとの距離をとりながら、苦々しくジェロームへ答えの分かっているその問いを投げかけた。

「俺に大人しく死ねってことか？」

ふざけるな。

何て傲慢さだ。

そう怒鳴りつけてやりたかったのに、咄嗟に声が出なかった。

（そうだ）

そう言っつて、あいつは笑った。

それは、俺がジェロームと一緒にいた中で一番穏やかで、最も慈愛に満ちたものだった。

が、それを合図に周りの奴らが一斉にこちらへ向かって攻撃を仕掛けてくる。

「ふざけるな！」

俺はそう吼えて、奴らを吹き飛ばし外へと出る。

（帰っておいで……死体になってその美しい顔を歪めて、帰っておいで）

その目に背筋が凍る感覚に襲われる。見なくなった悪夢が目の前に現れる走馬灯のように、その光景は俺に見せ付けるようにゆっくりと流れていく。運ばれていく死体、スコップの土を掘り起こす音、蹴り飛ばされた同族の顔。

イヤだ。

あそこに入るのは、イヤだ。

（お前は私のモノだろう、カルマ）

俺はその瞳と呪文のような言葉から逃げるように走り出していた。

（追え！決して逃がすな！）

その声が遠くから俺の耳に届いていた。だが俺の足が止まることはない、後ろから仕掛けられてくる攻撃を避けながら俺は森へとその足を向けた。

呼ぶな、俺の名を呼ぶな。

伸ばされる腕を狂気を悪意を全て振り払って俺は走っていた、耳を塞ぎたい衝動をひたすら足を動かすことへと費やすことで俺は何も聞かない振りをする。

呼ぶな。

呼ぶな。

その名を呼ぶな。

カルマ。

その名に倣って、罪を背負えとしゃがれた声が心臓に熱を与えて俺の動きを鈍くする。

カルマ。

嗚呼、体が揺さぶられる感覚にゆっくりと世界が明るくなっていくのが分かった。遠くで俺を呼ぶ声がある。ただ、それはアイツの声なんかじゃない。俺を責めたてるような声なんかじゃなくて、瞼の裏に橙色が溢れていく。

「目を開ける、カルマ」

遠くで声がある。

EPISODE : 09 (3 - 3)

9

「カルマってば！」

その甲高い声を引き金に、俺は明るい陽の光の下に帰ってきた。見ると耳元で、ロイが何やら小難しい形相で俺の方を睨んでいる。

「なんだよ」

「いや、なんか難しい顔してたからさ……大丈夫かなって？」

「お前に心配されたら俺もおしまいだっつーの」

人差し指で奴を軽くはじいてやると、途端ロイは頬を大きく膨らませながら不満と抗議の言葉を投げつけてくる。まったく、うるせえ奴だ。人の心配なんざしてんじゃねえよ。

「カルマ、怖い夢見たの？」

続けざまにサリナまで俺の顔を覗きこんできやがる。ガキ二人に心配されてみっともねえことこの上ない。

「見てねえよ」

下から見上げたサリナの顔、拳が持ち上がりその首にかかりそうになるのを押さえるのがやっとだった。

俺は一体何がしたいんだ？

そんな感情を紛らわせようと、俺は横のサリナへと全く関係ない話題を振る。

「ところで、お前いくつだ？」
「8つ」

返された答えに俺は内心意外だなと呟く。確かに、幼さは色濃く残る少女ではあるが、十は過ぎているように見えただが。

この年でさば読む必要もないだろうしそれが、真実の年齢なのだろうが。こいつがエルフなのも考慮に入れて、100だ200だつて言われる予想はしていたっていうのに、真逆の結果に俺はいまいち納得しないようす表情を隠すことも無くサリナを見た。

「カルマは？」
「忘れた」

無邪気に聞かれて、自然俺の言葉は素っ気なくなる。

忘れた。
忘れた。
忘れてしまいたい。

俺の人生の大半は、あいつのものだったのだから。

「ヤーイ、ボケじじい」
「ウルセエ！お前こそいくつなんだ、ああ？このクソがキがつ」

小煩いロイの羽を昆虫を捕まえるように摘まんでやりながら、俺はコイツに問い返してやる。

「じゅう…に。12才だよ！」

なんだ？おかしな奴だ。どこか口ごもったかと思うと、次の瞬間

には堂々と何の自慢にもならない事を胸をはりつつ口にした。
それは、やはり見た目よりもどこか若い気がする。

「違う、ロイ１１才」

水も飲み、落ち着いたサリナがロイを指差し訂正の言葉を差し入れた。

「ロイの次の誕生日で１２才」

「あつはは、オイラってばあわてんぼうさん」

こりゃ、参ったという風に自身の手で額を叩きつつ笑ってロイが俺の手からするりとすり抜けた。

こいつ、本物の馬鹿か？それとも、年を偽ってなんかいいことでもあるのっていうのか？まあ、所詮ガキはガキだし俺には関係のない事なんだが。

「まあ、いくつでも俺には関係ない事だけだな」

「なんだよ、それ」。カルマが聞いてきたんじゃないか」

「てめえらと会話を交わしてやるうっていう俺様の優しさだ」

「どこがだよ?!」

サリナの手から水筒をもぎ取ると、それに口をつけながら俺は何気なしにそう返答する。

「カルマやさしい」

隣でにこにこことそう言われ、言葉に詰まる。だから、なんなんだこのガキは。

俺がいつお前に優しくしたんだっつーの。

「カルマやさしい、さびしい」

何を言ってるんだ？寂しい？俺が？何に對して？

翡翠色の瞳が俺を真っ直ぐに射抜く。敵意も憎しみも妬みも何もない、ただ真っ直ぐで純粋な瞳。

その刹那、俺は怖いと思った。

幾つもの戦場を過ぎ幾つもの、死も敵と対峙しても何も恐れるものなどなかったというのに。

ひどく、この目が怖いと思った。

油断した瞬間に己の全てを浚われていきそうなそんな感覚。

「じじ、さびしい」

俺の半分もない手で、自分の胸の辺りをぎゅっと握り締めながらサリナは繰り返した。寂しいなんて言葉を俺は知らない。

寂しい？何が？そして、俺もまたもう一度己に問いかける。

「それはお前だろ？ったく。とつとつ、親の所にでもなんでも行つて甘えてろ」

口から出たのはいつもの軽口。

だが、心の中で何かがひっかかる、すつきりしない。何故こんなガキの言葉に俺が振り回されなくちゃならねえんだ？

「サリナ、カルマが寂しいのは友達一人もないからなんだぜ。きつと」

「カルマともだちいない？」

くすくすと笑いながら、ロイがサリナにそう吹き込むとサリナは驚いた表情でこちらを見つめて尋ねてくる。

「おまえらな、勝手に結論だすんじゃないやねえよ！」
「いるの？友達い？」

殺す、マジで、この羽虫殺す。
だいたい、なんなんだその人を馬鹿にしたような目は？！上から俺を見下ろすなんざなあ、100万年早いんだよ。

「ねえ？どうなの？いなさそうだよな」カルマって
「てめえ、いい加減にっ」

拳を握り締めて、俺は自分から大人気ないと分かっているけど殺気が立ち上るのを感じていた。絶対泣かせてやる！
そう決め、口を開いたが……その言葉の続きは他の物へと変わる。

「おい、今すぐ境界張れるか」

全身に緊張が走る。
こればかりは、忘れる事もない俺の習性。

嫌というほどの殺気を、まだ近くはない位置にはあるがはつきりと感じる。全く、嫌なセンサーがついているもんだ俺も。
近くに、奴らの気配を感じ取り俺は自身の殺気はもちろんの事気配を絶つ。風の音に耳を澄ませつつロイへと視線を送る。

「き、来てるの？敵が？」
「ああ、“遊びましょ”ってな。あちらさん遊びに来てくれたみた

いだぜ。遊ぶ気がないならとつと、結界張って“また今度”と洒落こもつや?」

口調はふざけたものとなったが、今の俺には余裕も油断も出すことなどではしない。忘れる事なんか誰が許すっていうんだ?

俺が、居る場所はこういう場所だ。呑気な精霊族と戯れている場合じゃない、つまり生きるか死ぬかそこにしか俺の居場所などない。認識したくない、事実には口元が嫌でも持ちあがる。

鬼ごっこは、そう簡単には終らない。

EPISODE : 10 (3 - 4)

ちっ…… 確実に近づいてきやがる奴らの気配。

俺は、ロイを急かせる様に声を掛けた。

「早くしろっ」

「分かってるよ」

急かしたてながらそう言うと、ロイは昨日と同じ要領で結界を張り始める。

昨晚と同じように光を発し始めた様子を見ながら、俺はどうにか間に合いそうだなと心中で呟く。ロイの身体が結界を張り終えて黄金色から元の色に変わり始めたその瞬間、奴らが姿を現した。

己の意思とは関係なく、心臓が俺の中で派手に動き出す。

間に合ったのか？

それとも間に合わなかったのか？

「くそ、逃げられたか」

「そう簡単に捕まっちゃくれないだろうさ。あまりカリカリするなよ、ダウザー」

数十人の魔族の中に立ちその男は、宥めるかの口調でそう言った。おそらくこいつが、頭だろうな。

「そりゃあねえ、あっちだって命がかかっているんだから必死に逃げるさ」

薄く笑みさえ浮かべながらそう言う。それに対してダウザーと呼ばれた男は不満そうだ。

こいつには見覚えがある。何度か対峙し、やり合ってきたが中々の使い手だったはず。

身体は半獣人という事もありガツチリとしていて全身が堅い毛で覆われている。ギリギリとした瞳に、口元から突き出ている鋭い牙が特徴的だ。

それに対してこのリーダー格の男は今日初めて見るな。

気配からして相当な腕前だと優に考え付くが一体？肩よりも数十センチ長いくらいのブロンズの髪、それに反して真っ黒な瞳が何だか妙に不安を掻き立てる。

一見すると唯の優男。顔立ちは、悪くない……まあ、俺には負けるけどな。瞳がどこか目を細めた狐を思わせる嫌な感じだ。

魔族なのか？いや、わからねえ。

「なあ、カルマ。あいつらが、カルマを追いかけてきているヤツラなのか？」

「知るか、黙ってる見つかるぞ」

注意深く奴等を観察している俺の肩に緊張感無く乗っかってきやがって。

空気を読めよ、この羽虫とばかりに俺は適当な言葉を投げる。

「この中ならいくら大きな声出しても平気なんですーっだ」

大声を張り上げながら空中で一点してみせるロイ。

この余裕に腹が立つ。今がどれだけ緊迫した状況なのかを分かっているコイツに腹が立っているわけなのだが、今こんなところで

コイツに腹を立てている場合じゃないと分かっているのに、それでも無視しきれない自分も苛立たしい。

「それしか特技ねえんだろ、どうせお前は」

「ありますー、たくさんありますー」

「いい加減に静かにしろ！聞こえねえだろうが」

「ロイ、しいー」

俺の言葉を補助するかのようになり、いつの間にか俺の隣にしゃがみ込んできていたサリナも、人差し指を口元に当ててロイに注意の言葉を向けている。

よし、偉いぞサリナ。

「サリナまで」

そしてそれにショックを受けているロイ、ザマアミロと軽く視線を向けてからやっと真面目な空気へと戻ることが出来た。

「あんたが直々に出てきて収穫なしじゃ、ジェロームの旦那もさすがに怒り狂うぜ」

ダウザーが、そう口元にわざとらしく笑みを浮かべながら言う。

そこからは、鈍く光る牙と赤黒い舌が覗いている。

「怒り狂うついでに、くたばってくれれば言う事なしなんだがね」

まるで、興味なしとばかりに言ったその男の名を、ダウザーは窘める様と呼んだ。

「アイリス」

アイリスと呼ばれたその男は、片眉をやや動かして尚も続ける。
どうやら、見た目以上に食えない奴みてえだな。自分の雇い主に
死ねって言うてるも同じだ……こいつもガードなのか？

「俺はね、どうでもいいんだよ。ダウザー、あのジジイも報酬も。
ただ、興味があるだけ」

「あんたともあろう人が、ガード上がりの陳腐な魔族にか？」

ダウザーてめー、絶対殺す。

こいつの会話に自然俺の顔には青筋が走る。

「ガードあがりの陳腐な魔族がこれだけの事やってのけているから
こそ、面白いんじゃないか」

歌うような声音、子供が自慢のペットを褒めるようなそんな言い
方。

しかし、目が笑っていない。奴の目は、真っ直ぐに半獣人を射抜
いていた。反論など何一つ口になどできないであろう、その空気に
ダウザーさえも、口を噤む。

そうして、アイリスはゆっくりとこちらへと振り返った。

「そうだろう？」

気が付くと俺は、その口がそう動くのを食い入るように見ていた。
間違いなくこれは、俺に向かって発せられているものだとは本能的
に感じ取る。

「そこにいるのかっ？！」

静かなアイリスの口調に対して、ダウザーは一気に身体に殺気を漂わせてアイリスが向いている方向、つまりこちらへと向けてくる。俺は無言のまま、サリナに張り付いているロイを見る。しかし、ロイは黙ったまま首を横に振っていた。

大丈夫だつて？こんな状況でそんなことが言えるのか？現にこいつはこっちを向いてあの台詞を吐きやがったっていうのに。俺は、下唇を噛みジツとより気配を殺す。

「いーや。ただどこかで見ているんだろうなあとと思うのだけれどね。あんな数分で気配を感じさせない距離まで逃げるなんて出来るはずがないじゃないか」

奴の台詞に結果の威力は健在で、こちらの居場所はバレていないと安心したはずの俺の身体には、今も尚嫌な汗がじつとりと背中を伝っている。

本能が、こいつはヤバイと告げている。身体の細部から発せられる信号が胸を締め付ける。

「どこで見ているのか知らないが、随分便利なお友達が出来たみたいじゃないか。けどね、お前の手はいつも血まみれでとても臭う、死臭がする。どれだけ逃げ回ってもそれを拭い去る事などできないように、逃げ切る事など一生出来ないんだよ……一生自由になんかなれない」

ニッコリと微笑んだその顔に、一気に血の気が引く。

「そうだろう、カルマ？」

怖いのか？いや、違う。

奴の言葉に一つも否定できない自分。

そんな、自分に背筋が凍る。

何故、何故だ、どうして俺はこんなに諦めている？

“だから、早く私と遊ぼう”

最後の一言は、声には出さなかった。

だが、俺には読み取る事が出来た。俺にだけ分かればあいつにとってはそっちの方が都合がいいんだろう。

「だったら、この辺をしらみつぶしに探せばいいんじゃないのか？」
「時間の無駄だ」

横からかけられる声、しかしそれに対してあっさりと言い放つと
ダウザーの肩を軽くポンと叩くと方向を変えた。

「けど」

「無駄だよ、無駄はキライなんだ。ダイツキライなんだよ。大丈夫だよ、必ず捕らえるから」

後ろから納得しかねる声で奴はそう言ったが、アイリスは考えを変える気はないらしい。

「アイリス？」

魔族達へと、出発命令を出し自分達もその場から離れようとしたダウザーが、動こうとしないアイリスへと声をかける。

「行っていてくれないか、ダウザー頼むよ」

怖いくらいの笑顔。

頼む。

いや、頼んでいるのではない、命じているのだ。ここから立ち去れと、アイリスを包む空気がそう言っている。それを感じ取っているダウザーもまた、やや考えた後、“わかった”と一言告げてその場所を後にする。

そうして、奴らの気配さえも感じなくなつてから満足そうに再びこちらへと振り返る。その表情は、まるで旧友に対するもののようで、真つ黒な瞳は、俺の何より恐れた墓穴に見えた。

「カルマ、もうすぐあのジジイはくたばるよ……その前に会おうね必ず」

親友との、再会の約束のような言葉。

……動けない

何故？動けない？

「お兄ちゃん誰とお話してるの？」

意識が一瞬跳んでいたようだ。

その声に気が付いて振り返ったアイリスとほぼ同様のタイミングで俺もまた、その声の主に目をやる。

子供がそこにはいた。

子供だった気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092d/>

S H A D E

2011年1月9日04時59分発行